

新しい農業の姿を求めて

地域住民・消費者との交流を深める

大網白里町4Hクラブ

人口増加で、消費者を多く抱えた大網白里町。農業の将来を背負って立つ大網白里町4Hクラブは、こんな条件を活かした新しい農業の姿を見つけられないかと、多くの住民の皆さんとの交流の場をもっています。



クラブ員たちは、5月15日に北今泉の畑20アールにサツマイモとトウモロコシを作付けしました。

サツマイモは、町第二保育園の園児に収穫の喜びを味わってもらおうと、植え付けの体験をしてもらいました。五月晴れの空のもと、園児の声もにぎやかに、たどたどしい手つきで苗を植える姿を見て、思わず参加者の顔がほころびます。秋までクラブ員が丹誠込めて管理し、一緒に収穫を楽しみます。芋を引っこ抜き、

おどろき感動する姿を想像すると、今から楽しみです。植えた時には、訳がわからなかった園児も、きっと良い思い出になることでしょう。

トウモロコシは、8月に収穫できる予定で、こちらは、地域のひとに参加を呼びかけ、収穫祭をします。町の農業に関心を寄せてくれる方が、一人でも増えるような収穫祭にしたいと、アイデアをこらしているところです。



ナスの交配にマルハナバチ利用

従来、ナスの交配にはホルモン剤を使用するのが一般的でした。近年、高知県・愛知県等の主産地において栽培の省力等を目的にマルハナバチの利用が進んでいます。

管内のナス農家でもいち早くこの技術に着目し、3年前から試験利用が始まっていました。そして、現在では6戸の半促成ナス栽培農家に普及しています。

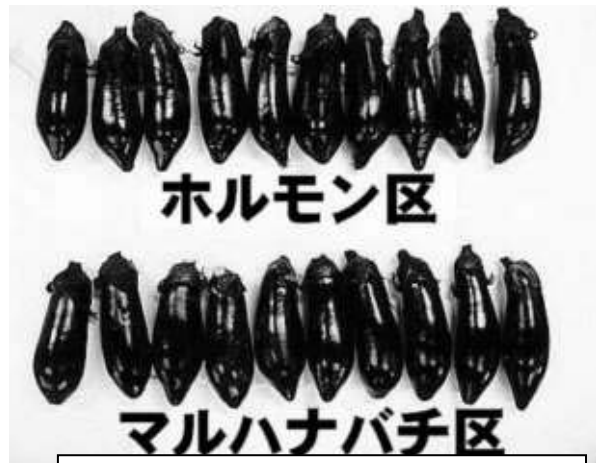
ナスの花粉形成に好適な環境下で導入する

12 以下の低温や30 以上の高温条件下、または強樹勢等により花粉の充実が悪いときは石ナス等の不良果の発生が多くなる場合があります。室温及び樹勢管理には注意します。

農薬のマルハナバチへの影響を考えて

合成ピレスロイドまたは有機リン系の殺虫剤は、影響が大きいものが多いので、基本的には定植前後を除き使用しないようにします。

これら以外の殺虫剤、殺菌剤については使用できるものが多いですが、使用にあたっては農協や普及センターに問い合わせ、ハチへの影響を確認するようにして下さい。また、除草剤で影響するものがあるので注意します。



写真は、ナスの形状を比較したものです

ハウス開口部の被覆

マルハナバチを放飼すると、ハチは最初、花の位置等を覚えるため学習飛行を行います。この時期や施設内環境の不良時にはハチが施設外へ逃げ出すことがあります。施設開口部は施設内の通風等を考慮しながら、マルハナネット等の網で被覆するようにします。

これらの点に注意し、省力化に向けて導入を考えてみてはいかがでしょうか。

目標穂数の8割確保で中干し

5月下旬から6月上旬になると、各品種とも中干しの時期に入ります。目標穂数の約8割程度の分けつが確保できたら、中干しに入ります。品種別の茎数は、表を参考にしてください。特に、梅雨に向かう時期になりますので、梅雨入り前の好天時に行えば効果的です。

中干しは、幼穂形成期（出穂25日前）の少し前まで行い、その後は間断かんがいで管理します。

穂肥の施用

穂肥の目的は、一穂もみ数を増加させ、イネの体内の窒素濃度を高めて登熟を良好にすることです。

施用時期の基準は、品種により決まっています。「ふさおとめ」や「コシヒカリ」の場合は、出穂18日前で、幼穂の長さが1センチメートルの時が適期です。最近の研究では、「穂肥を遅らせて出穂14日前に施用した場合、玄米中の粗たんぱくが増加した」とされていて、食味の低下の原因になります。

このため、「ふさおとめ」では、幼穂形成期に茎数などの生育量が適正值より多い場合、穂肥の時期を遅らせるのではなく、減量して適期に施用します。

また、「コシヒカリ」では、穂肥を減量するか、倒伏の危険に配慮して、施用時期を遅らせることが適当です。

低温時には、深水かんがいを

6月中下旬以降は、各品種とも低温に弱い時期を迎えます。イネは穂ばらみ期の内でも、特に出穂10～15日前が、最も低温に弱く、この時期に日平均気温20以下、最低気温17以下の低温が数日続くと、花粉の形成が阻害され、著しい不稔が発生します。これを障害型冷害と呼んでいます。

気象情報に注意し、低温が予想される場合は、深水かんがいにより、幼穂の保護を行ってください。

時期別の茎数・穂数の目安 (本/平方メートル)				
品種名	土性	中干し開始 目標茎数	穂肥時 目標茎数	目標穂数
ふさおとめ	砂質	460	600	490
	壤質			
ひとめぼれ	砂質	350	575	465
	壤質	340		425
コシヒカリ	砂質	360	500	470
	壤質	340		425

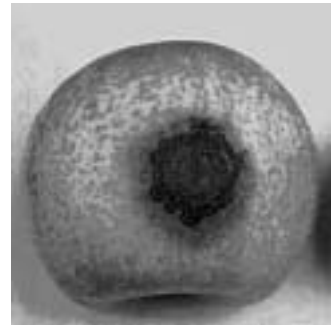
ナシ、これからの病害虫防除

黒星病

幸水では6月になると果実への感染が起こりやすくなり、裂果の発生や収穫果の商品性に最も関係のある時期となります。7月中旬までの間、前回の防除の後に降雨があった場合は次回の防除まで10日以上間隔を開けないようにします。

輪紋病

6月から果実への感染が起こりやすくなりますが、感染の有無が収穫期にならないと確認できません。発病すると果実には同心円状の病斑が生じ商品性は全くなくなります。7月末までの間、前回の防除の後に風雨があった場合は次回の防除まで10日以上間隔を開けないようにします。



シンクイムシ類

6月中旬頃から発生が多くなり、果実内に食入します。収穫までの間、幼虫が果実内に食入する前に殺卵や殺虫を目的とし防除暦にしたがって定期的に防除する必要があります。

ハダニ類

春以降ナシ園では下草上で徐々に増殖し、7月以降はナシ樹に移動を開始します。しかし、7月前であっても草刈り、除草によりエサを失い、ナシ樹に移動することがあります。したがって、草刈りなどの約2週間後にナシ葉上での寄生の有無を確認し、発生が認められたら防除を行います。また、除草剤により除草する場合は殺ダニ活性のあるハービー液剤などを使用します。

フレッシュミセス「ひまわり会」



本年3月、山武地域女性農業者交流会の進行役をグループ全員で挑戦。ハンドベルによる演奏も参加者に指導しました。会場全体に澄んだ音色のハンドベルが響き渡り、緊張と真剣な眼差しの参加者は、フレッシュな雰囲気交流会に感激の時間を過ごしました。

東金市・大網白里町・九十九里町の若妻グループとして誕生以来6年を経過した「ひまわり会」は、現在会員13名。酪農家・施設園芸・水稻など、経営のパートナーとしての能力を磨いています。

月例会には、季節の寄せ植えやフラワーアレンジメント、焼き肉のタレづくりなども年中行事化してきました。今年のテーマには、20分で仕上げる自慢料理と、わが家のルールづくりをとりあげます。

子育てに一段落ついた人、真っ最中の人とさまざまでも意見交換できることの安心感が、仲間意識を強めているフレッシュな「ひまわり会」です。

第252号(2001年6月1日発行)より
山武農業改良普及センター